



平成 29 年度 (2017 年度) 個人研究
滋賀大学教育学部附属中学校

調査研究型の総合学習が卒業後に与える成果に関する、卒業生への世代別追跡調査

滋賀大学教育学部附属中学校
七 里 広 志

研究の要旨

本校が取り組む「BIWAKO TIME」(以下、BT)は、全国に先駆けて実施され、34年に及ぶ長い歴史を持ち、全校体制で取り組んでいる総合学習である。時代とともに少しずつ修正と改善を重ねながら現在に至っており、「郷土である滋賀」を学習フィールドとし、「学び方を学ぶ」調査研究型の学習を継続している。

今、34年間の本校の卒業生に、BTで身につけた力がどのように生きて働く力として活用できているかを調査することで、本校が時代を追って変遷する教育課題に対応しBTの指導のポイントをどう変え、身につけた力にどう関連してきたかがわかると考え、本研究に着手した。総合学習でどのように取り組み、どのようにアクティブ・ラーニングを進めておくと、生徒たちの将来にとってどのような力が身につくのか、モデルを示すことができると考えた。

調査の結果、本校が全国にBTにおいて、中学生が身に付けてきた力が、卒業後に様々な場面で役立っていることがわかった。また、当時の各教員がどのような課題意識を持ち、どのような学習を仕組んだかによって、身に付いた力に世代ごとの違いが生じていることがわかった。

キーワード 総合的な学習の時間、調査研究型、卒業後の成果、質問紙調査



エネルギー教育校
指定(29-31年度)

郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成
滋賀大学教育学部附属中学校



1. 研究の目的

滋賀大学教育学部附属中学校(以下、本校)では、1983年(昭和58年)から調査研究型の学習活動である「BIWAKO TIME」(以下、BT)を行ってきた。これは、2000年(平成12年)から段階的に始められた「総合的な学習の時間」(以下総合学習)よりも以前から先行していたことになり、本校のBTが全国の総合学習の先駆けとなったと言える。総合学習の開始から18年が経過し、全国的にも一定の成果が挙げられてきたはずである。しかし、総合学習に関する研究を概観すると、どのような総合学習を行うべきか、総合学習で児童や生徒がどのような学習成果を挙げたのか、といった研究は多くみられるものの、総合学習の目標である「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」が卒業後にどの程度身につけていて、どのように生きて働く力となっているのか、追跡して分析した研究はあまり見受けられない。

また、本校では2005年(平成17年)に、卒業生にアンケートや座談会を実施することでBTの効果検証を行った。その後、学習指導要領の改訂により、総合学習の時間を縮減する一方、BTを通じて論理的思考力を高めたり、探究活動をより重視したり、BTの探究活動の手法を各教科の授業でアクティブ・ラーニングとして横断的に取り入れたりするよう、カリキュラムを変えてきた。そこで、今、34年間にわたって調査研究型総合学習を続けてきた本校の各世代の卒業生に、BTで身につけた力がどのように生きて働く力として活用できているかを調査することで、本校が時期により重視していたポイントと、身につけた力との関連がわかると考え、本研究に着手した。本稿では、総合学習でどのように取り組み、どのようにアクティブ・ラーニングを進めておくと、生徒たちの将来にとってどのような力が身につくのか、モデルを示すことができると考えた。

2. BTはどのような変遷のうえ成り立っているのか

昭和58年(1983年)から継続して郷土環境学習としての「びわ湖学習」の実施が始まった。当初は特設の学習であったが、現在の総合的な学習の時間の先駆けとなった¹⁾。それと並行して、平成3年(1991年)から3年生で特設の「環境学習」と「国際理解学習」が実施されるようになった。しかし、学習内容や学習方法が重複し、多岐にわたってきたため、平成6年(1994年)に整理・統合を図り、「びわ湖学習」、「環境学習」、「国際理解学習」を合わせた「BIWAKO TIME」(BT)となった²⁾³⁾。その後、平成20年(2008年)度から始まった「情報の時間」での学習成果を生かし、思考力の向上を目指すため、思考ツール⁴⁾をワークブックに掲載し、生徒に活用させるように指導するようになった。近年は、平成24年(2012年)度から実施された学習指導要領へのスムーズな移行を意識し、学習の時間をより一層「学び方を学ぶ」場にしていくため、学習計画の精選を進めた。時数については、展開内容を精選し28時間(1年生ではBTのねらい等のガイダンス1時間を設けた29時間)で実施した。

また、近年は、学習指導要領に示されている探究のプロセスをもとに、「A 課題の設定→B 情報収集→C 整理と分析→D 発表と交流→E まとめ→F 新たな課題」というBTのプロセスを意識した探究的学習活動を各教科で横断的に取り入れ、アクティブ・ラーニングが実施されてきた⁵⁾。こうしたことから、学習指導要領改訂を見越した、主体的・対話的で深い学びにつながる総合学習であるといえる(表1)⁶⁾⁷⁾。

3. BTとはどのような学習か

BTは、「総合的な学習の時間」として、全校体制で取り組んでいる学習である。その目的は、「郷土である滋賀」を学習フィールドとし、調査研究活動を通して「学び方を学ぶ」ことである。具体的には、各教科の学習で得た知識や体験を生かせるように、逆にBTで学んだことを各教科での学習で生かせるように、「学び」をより活用できる力へと再編することである。

また、異学年合同のグループ活動による課題発見・解決学習や、夏季・秋季休業をはさんで28時間という長期にわたる学習を実施していることも大きな特徴である。なお、グループは、生徒の課題意識を調査して、意識の近い生徒同士を同じグループにするよう調整している。以前は分科会や領域を設け

ていたが、現在は研究テーマをカテゴライズして作成された分類表から、テーマ決定の参考にさせている(表2)。

BT では、以下のように学習の段階に合わせて、5つの活動場面を設定している(表3)。

BT の活動場面	探究のプロセス
① 課題の発見と計画(5時間)	A 課題の設定
② 調査研究活動(12時間)	B 情報収集
③ 中間整理(2時間)と発表準備(4時間)	C 整理と分析
④ まとめと発表(交流会2時間, 代表発表会2時間)	D 発表と交流
⑤ 学習の反省とまとめ(1時間)	E まとめ F 新たな課題

(時間数は、平成29年度に実施のもの)

課題の発見と計画には、「全校ガイダンス」を行っている。課題探究のためには、中心の活動場となるベースルーム以外にサテライトルームを用意している。情報図書室、コンピュータ室、技術室、家庭科室、理科室、職員室のそれぞれに担当指導者がおり、書籍やコンピュータ(情報の処理やWebサイト閲覧による調査)、電話やファクシミリなどの使用、研究模型や実験装置の製作、伝統食の調理などにも対応できるようにしている。さらに、博物館などの社会教育施設、大学などの教育研究機関、滋賀県庁などの行政機関を訪ねたり、地域の方々の協力を得たりしながら研究活動を進めている。

また、生徒は一人一冊「BTワーク」を所持しており(表紙写真)、日々の活動での成果を記録していく。BTワークの中には情報収集・交流の場面で役立つ思考ツールや活用方法が記載されており、各教科での経験を活かしながら、それらを調査研究活動で役立てている。

その後、調査研究の時間と発表準備の時間を区別して取り組んでいる。発表には、模造紙やA5コピー用紙のスライド、パソコンによるスライドなど、複数のものを活用している。さらに、代表のグループが選ばれ、BTのテーマである「学び方を学ぶ」に関わって、これまでの研究成果を整理し、交流する場として、まとめの集会を行っている。

BTのねらい

- ①課題発見や解決の仕方、学習成果の発表などの学習過程を通して、生きてはたらく学び方を身につけさせる。
- ②学際的研究を通して、課題追究の技能を習得させ、幅広いものの見方や考え方を身につけさせる。
- ③自主的・主体的に学ばせるとともに、仲間と協力して学ぶ態度を身につけさせる。
- ④郷土・地域やびわ湖についての認識を深めさせ、それらとともによりよく生きようとする態度を身につけさせる。
- ⑤身近な課題が、広く社会・世界の課題に通じていることを認識させ、現在や未来の社会をよりよく創造していこうとする意欲を喚起する。

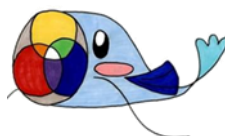
BTで育てたい生徒の姿

- 「自然」・「文化」・「社会」の在り方やその関わりについて考えることができる。
- 先人の残してくれた大切な宝や滋賀に息づく文化をいつまでも守り育てることができる。
- 自分たちが考えたことを次世代に引き継ぐ努力を實踐できる。

せじみん



ベンなまーず



(生徒がBTで制作したゆるキャラ)



表 1 本校の「びわ湖学習」「BIWAKO TIME」の変遷

年度	学習の名称	含む領域	内容等	時間数
昭和 55 1980 昭和 56 1981			自己を磨く活動として自主的課題研究に取り組み学年の枠をはずし、必要に応じ助言する学習の開始。	
昭和 57 1982 昭和 58 1983 昭和 59 1984	(総合学習を位置づける) 郷土学習 (びわ湖と私たち)	総合学習 郷土学習(びわ湖学習) 性教育 生徒会活動 校外学習 道徳 英会話 2年 人権学習 選択教科 3年 フリータイム	自主学習の時間の設定。構成員数を限定せず自主的選択学習の開始。 18 のテーマ別分科会を設定し、異学年縦割りの学際的自由研究活動へと発展する。文部省の研究開発校の指定を受ける。	24 24
昭和 60 1985 昭和 61 1986 昭和 62 1987	郷土学習	総合学習 「びわ湖学習」 性教育 総合活動 校外学習 生徒会活動 に分離する	1 年生を対象に基礎講座の設定。発表会に向けてのメディア講習会を開く。 深まりのある話し合い活動の展開の指導。	24
昭和 63 1988 平成元 1989 平成 2 1990	びわ湖学習			24 24
平成 3 1991 平成 4 1992 平成 5 1993			「びわ湖学習」に並行して、環境学習、国際理解学習を展開する。	24 24 22
平成 6 1994 平成 7 1995 平成 8 1996 平成 9 1997 平成 10 1998 平成 11 1999 平成 12 2000 平成 13 2001 平成 14 2002 平成 15 2003 平成 16 2004 平成 17 2005 平成 18 2006 平成 19 2007 平成 20 2008 平成 21 2009 平成 22 2010 平成 23 2011 平成 24 2012 平成 25 2013 平成 26 2014 平成 27 2015 平成 28 2016 平成 29 2017	「BIWAKO TIME」 郷土学習 国際理解 環境教育 グローブ計画 環境・郷土に焦点化 「情報の時間」との関係を強化 論理的思考 探究的学習活動	びわ湖学習と国際理解学習をドッキングして「BIWAKO TIME」とする。1, 2 年生郷土、国際理解学習で 10 分科会の開始。3 年生は環境学習で外部講師による講話を実施。 「学び方を学ぶ」郷土学習、国際理解学習、環境学習のそれぞれに 5 分科会を開設し、15 分科会となる。 A 自然, B 自然と人, C 人, D 人と社会, E 社会の 5 領域 10 分科会を開設する。 A 自然, B 自然と人, C 人, D 人と社会, E 社会の 5 領域でベースルームを設置し、分科会を廃止する。 5 領域から A 自然, B 人, C 社会の 3 領域に再編。 ワークブックにシンキングツール(思考ツール)を掲載。 A 自然, B 文化, C 社会の 3 領域に変更する。 テーマ設定時にピラミッドストラクチャーを必須化。 3 領域を廃止し、カテゴリー表に基づくテーマ設定によりグループ編成を行う。	30 20 22 23 30 40 40 40 46 54 50 44 30 30 30 24 24 24 24 24 28	

滋賀大学教育学部附属中学校「生きる力を育てる総合学習の実践-必修学習・選択学習との関連を図って-」, 明治図書, 1997
 滋賀大学教育学部附属中学校「総合学習『BIWAKO TIME』の学習効果検証」, 2006
 滋賀大学教育学部附属中学校「BIWAKO TIME ワークブック」, 毎年
 滋賀大学教育学部附属中学校「研究紀要」, 毎年

を参考に作成(表 2 も同じ)

表2 開設分科会・ベースルームの変遷

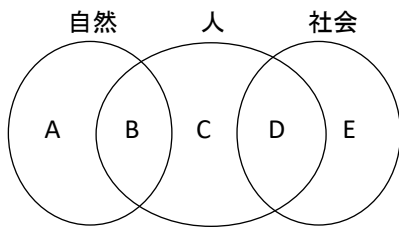
昭和58年(1983年)度

分野	テーマ
1. 琵琶湖と人々の歩み	(1)びわ湖と古代の人々
	(2)びわ湖と中世の人々
	(3)びわ湖と近・現代の人々
2. 近江の文化	(4)近江の民話
	(5)近江の文学
	(6)郷土芸能(古代芸能)
	(7)伝統工芸
3. びわ湖と産業	(8)びわ湖と生活用水
	(9)湖上交通と人々
	(10)湖に生きた人々
	(11)びわ湖と工業
	(12)農業と水
	(13)びわ湖の誕生と歴史
4. びわ湖の自然	(14)湖流と気象
	(15)びわ湖の生物
	(16)赤潮と水質近畿の水がめ
5. びわ湖の課題	(17)自然破壊の現状と課題
	(18)水と生活

平成7年(1995年)度

BIWAKOを見つめる分科会	自然と環境	(1)郷土の風土
		(2)びわ湖に生きる動植物
		(3)実態調査「相模川」
	くらしと文化	(4)びわ湖の今を生きる人々
		(5)びわ湖に息づく伝統産業
	郷土の課題	(6)びわ湖の水の今、そして未来
		(7)びわ湖の開発のゆくえ
		(8)歴史の中の近江と100年後の滋賀
BIWAKOから見広げる分科会	自然と環境	(9)びわ湖と世界の湖
		(10)実態調査「酸性雨」
	くらしと文化	(11)近代商人と日本の産業
		(12)近江の食べ物・世界の食べ物
		(13)近江の祭り・世界の祭り
郷土の課題	(14)国際化する社会の中の私たち	
	(15)「地球」がかかえる諸問題	

平成12年(2000)年度



領域	NO	分科会名
A	1	実態調査「びわ湖」
	2	滋賀の風土・滋賀の四季
B	3	びわ湖のめぐみと人々のくらし
	4	実態調査「相模川」
C	5	滋賀を生きた人々
	6	滋賀の今を生きる人々
D	7	滋賀に息づく伝統と文化
	8	実態調査「大津のくらし」
E	9	住みよい滋賀へのアプローチ
	10	国際化する滋賀の中の私たち

平成19年(2007年)度

領域	
A	自然
B	人
C	社会

平成24年(2012年)度

領域	
A	自然
B	文化
C	社会

平成28年(2016年)度

分類1	分類2
100歴史	101伝記 102遺跡 103伝説 104伝統
200社会科学	201行政 202風俗習慣 203教育・福祉・人権 204環境問題
300自然科学	301地学 302生物 303植物 304水環境
400産業・経済	401第1次産業 402第2次産業 403第3次産業
500芸術	501絵画・書道 502諸芸・娯楽 503音楽・舞踊 504スポーツ・体育
600言語・文学	601言語 602作品・作家

表 3 BIWAKO TIME の流れ(写真は平成 28 年度と 29 年度)

学習の流れ

①総合学習ガイダンス(1時間)



29年度のテーマは「つなげる」
○生徒間で思考をつなげる
○過去の資料をつなげる

①総合学習ガイダンス(1時間)

全校集会形式で、全員で総合学習のガイダンスを、BT、CT、「情報の時間」担当の教員から聞き、配付されたカテゴリー表(表 2)をヒントに希望する領域を決める。自分のテーマを決める際には、思考ツールで自分の関心のあることを整理させる。

例年 BT 担当から本年度の BT のテーマを発表する。平成 29 年度は、「つなげる」だった。

②テーマ設定・学習企画作り(4時間)

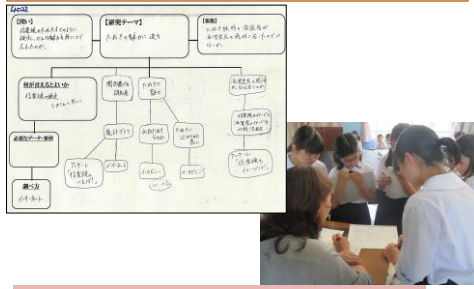
似たようなテーマの生徒同士でグループを組み、異学年合同グループでの活動をスタートさせる。

自分たちの関心のあることについて、思考ツールを使い、共通点を見つけたり、アイデアをふくらませたりする。図書室で保管している過去の BT の調査ファイルや、タブレットに保管した昨年度の全校生徒の BT レポートも活用できる。

②テーマ設定・学習企画作り(4時間)



②テーマ設定・学習企画作り(面談)



A課題の設定(ピラミッドストラクチャー)

②テーマ設定・学習企画作り(面談)

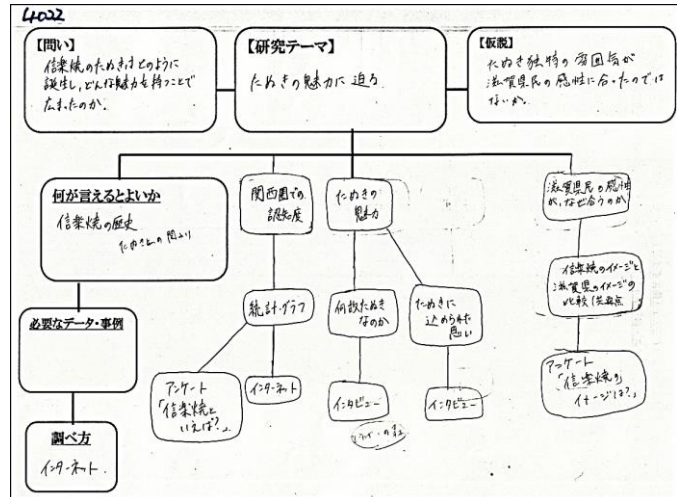
各グループでは、研究テーマと問いを立てさせる。その後思考ツールの一つであるピラミッドストラクチャーに研究計画を立てさせる。

そのうえで、ベースルーム担当教員から「試練の面談」を受ける。教員は、説明を聞く中で、指摘しながら、生徒の思考にゆさぶりをかけるようなアドバイスを与え、生徒の思考を深めることを意識する。

平成 29 年度の主な研究テーマ

- (遺跡 3)膳所城が取り壊された理由
- (地学 4)滋賀を震源とした震度 6 強の地震によるダメージは?
- (生物 3)南湖の臭いが改善されない原因
- (生物 4)ホンモロコにとって最も住みやすい環境とは? Part3
- (商業 1)ビワイチの可能性とは?
- (通信産業 9)スマホと学力向上の関係性
- (音楽・舞踊 2)琵琶湖周航の歌って、なあに?
- (作品 4)滋賀県でロケ地の魅力を滋賀の作品から伝えよう!

研究計画(ピラミッドストラクチャー)



③調査研究活動(10時間+夏休み)



B情報収集(訪問型の校外活動は必須)

③調査研究活動(10時間+夏休み)

BTの時間は、集まったグループのメンバーで調査した内容をまとめたり、分析したりすることが重要なので、なるべく本やWebサイトで調べる作業は家庭や昼休みのコンピュータ室の開放などで行うようにしている。

図書は、滋賀県立図書館や大津市立図書館などから一定期間まとまった数を借りている。

なお、訪問型の校外活動を必須としている。校外活動に行きやすいよう、先に帰りの会を行うオープンエンドの日を設けている。

④発表準備(4時間+秋休み)

各グループの調査研究活動で集めた情報を思考ツールで整理し、ベースルールの担当教員と中間面談を行う。

整理ができてから発表準備に入る。発表は、紙スライドパソコンスライド、模造紙、画用紙などを使用する。各グループ7分で発表できるよう、リハーサルを行う。

④発表準備(4時間+秋休み)



C整理と分析

⑤調査研究発表会(2時間)



⑤調査研究発表会(2時間)

目的は、約半年間にわたり取り組んできた調査研究の内容、考察、主張を、相手にわかりやすく、論理的に発表することと、他のグループの発表を自分たちと比較しながら聞き、良さを評価したり、疑問を出し合ったり、足りない部分を補ったりしながら、みんなで深め合うことの2点である。

7分の発表のあと、3分の質問・交流タイムを取る。ここで質問が出て、発表グループの学習がより深められるよう指導する必要がある。

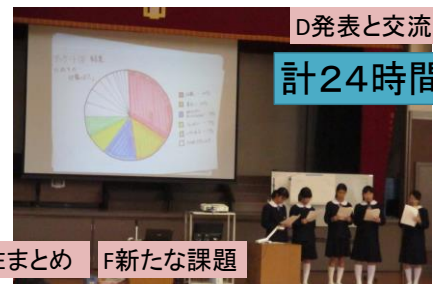
⑥まとめの集会(2時間)

各ベースルームから選ばれたグループの発表を各自の調査研究を比較しながら聞き、「代表グループの良い点」から「自分たちに足りなかったこと」を分析させる。

⑦反省とまとめ(1時間)

調べた資料をファイルに整理して、今後の生徒が閲覧できるようにしたり、質問紙調査に記入したりする。あわせて、各自がBTを通して何を学んだかを明確にすることを目的として、レポートの提出を課す。

⑥まとめの集会(2時間)



Eまとめ F新たな課題

⑦反省とまとめ(1時間)

4. 卒業生を対象とした質問紙調査

1. に示した目的のため、卒業生を対象として調査を行った。具体的に以下のような方法で実施した。

(1) 卒業生への質問紙調査

調査対象は、BT の前身である「総合学習」が始まった昭和 58 年(1983 年)卒業生⁸⁾から直近の平成 29 年(2017 年)の卒業生とした。その中から昭和 58 年段階で各学年 145 名程度、平成 8 年(1996 年)以降は各学年 120 名程度が卒業している。その中で各学年 20 名程度抽出した。抽出者には質問紙に返信用封筒を同封して送付した。

質問紙は 680 通送り、宛所不明で 156 通が返送された。郵送された 524 通のうち 122 通の回答を得た。有効回答率は、23.3%となった。

質問紙の内容を以下に示す。

1. 卒業年と性別
2. 現在の職業
3. あなたは今、以下のスキルについてどの程度身につけているとお感じですか。それぞれ最も近い番号をお答えください。
*質問項目は、現在の中学校教育で必要とされている探究的学習活動によるものと、本校が BIWAKO TIME(郷土学習・琵琶湖学習)でねらいとしてきたものによります。
身につけていない←→身につけている
1 ・ 2 ・ 3 ・ 4
A. 必要なときに課題を適切に設定できる
B. 情報を適切に収集できる
C. 集めた情報を整理し、分析できる
D. 集めた情報を適切に提示することができる
E. 集めた情報を自分のものとして活用できる
F. 整理した情報から新たな課題を見つける
G. 幅広い見方や考え方ができる
H. 自主的、主体的に課題に取り組むことができる
I. 仲間と協力して課題に取り組むことができる
J. 郷土である滋賀に関心を持っている
K. よりよい社会にしていこうとする意欲がある
L. 環境問題に関心を持っている
4. 3. でお答えいただいたスキルは、本校で学ばれた 3 年間の BIWAKO TIME(郷土学習・琵琶湖学習)を学んだことがどの程度、元となっているとお感じですか。それぞれ最も近い番号をお答えください。(BIWAKO TIME が元になっているスキルに限ってお答えください)
元になってはいない←→元になっている
1 ・ 2 ・ 3 ・ 4
5. 4. でお答えいただいたようなスキルが、どのような場面で役立ったとお感じですか。4. の記号と具体的な場面を 3 つまでお答えください。
例 I 町内会や PTA の役員になった時に様々な人と取り組めた
例 A 大学で研究テーマを決定する際に BT の手法を思い出しながらできた
6. 4. や 5. でお答えいただいたスキルは、中学生の時の BIWAKO TIME(郷土学習・琵琶湖学習)のうち、どのような学習によって身についたとお感じですか。当時された学習の例を挙げてお示してください。
7. 卒業後、BIWAKO TIME(郷土学習・琵琶湖学習)を振り返る時に、もっとこうしておけばよかったと思うことはありますか。
*具体的事例をインタビューさせていただける方を募集しています。ご協力いただける場合は、連絡先をご記入ください。(秋ごろ・本校で・15 分~20 分程度を予定)

(2) 卒業生への聞き取り調査

(1)の質問紙調査で協力できると回答した卒業生や、本校に用事があったり来校する卒業生を対象に、実際に本校へ足を運ぶ距離や日時、世代のばらつき等の条件が適した人に対して聞き取り調査を行い、BTでの学びが卒業後の生活の中でどのように生きて働いているか、より詳しく把握した。聞き取り調査は原則として本校で行い、卒業生の許可を得て録音もした。時間は30分を標準とし、実際には15分～40分程度で実施した。

実施した結果、様々な世代から14名の聞き取り調査を行うことができた。

聞き取り調査で尋ねた質問項目を以下に示す。

1. 卒業年、性別、職業
2. BTでどのような学習をしていたか。
3. BTでどのようなスキルを身につけていたと思うか。
4. BTで学んだことで、今どのようなスキルがついていると思うか。
5. BTでつけたスキルが、自身の日常において、どのような場面で役立っていると思うか。
6. 今の中学生には、どのようなスキルを身につけておくべきだと感じるか。
7. その他(本校の総合学習の一つである「情報の時間」を経験している世代には、その成果等)

5. 質問紙調査の結果と分析

回答のあった122通の質問紙について、結果を分析するのに、回答者の世代のばらつきや表1に示したBTの変遷をふまえて、表4のように世代に分けて集計をした。

表4 本校卒業生を対象としたBTに関する質問紙調査の世代区分

世代	卒業年	BTの概要	卒業生の現況	回答者数
I (上)	昭和58年(1983年) ～平成11年(1999年)	BTが創設され、生徒は分科会を選択して学習内容を決めていた	社会人としての経験豊かな人が多い	39
II (中)	平成12年(2000年) ～平成22年(2010年)	5領域から3領域となり、時間数も多く、自由度の高い学習だった	学生と社会人が多い	41
III (下)	平成23年(2011年) ～平成29年(2017年)	問いを立て、思考ツールを使い、論理的な探究学習を求めた	高校生や大学生が中心	39
不明				3
合計				122

質問紙調査のうち、3.と4.の結果を世代ごとに整理して図1～3に示す。また、5.の結果を整理して表5に示す。聞き取り調査で得た主な回答を図4に示す。

今、スキルがどの程度身についているか

BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか。

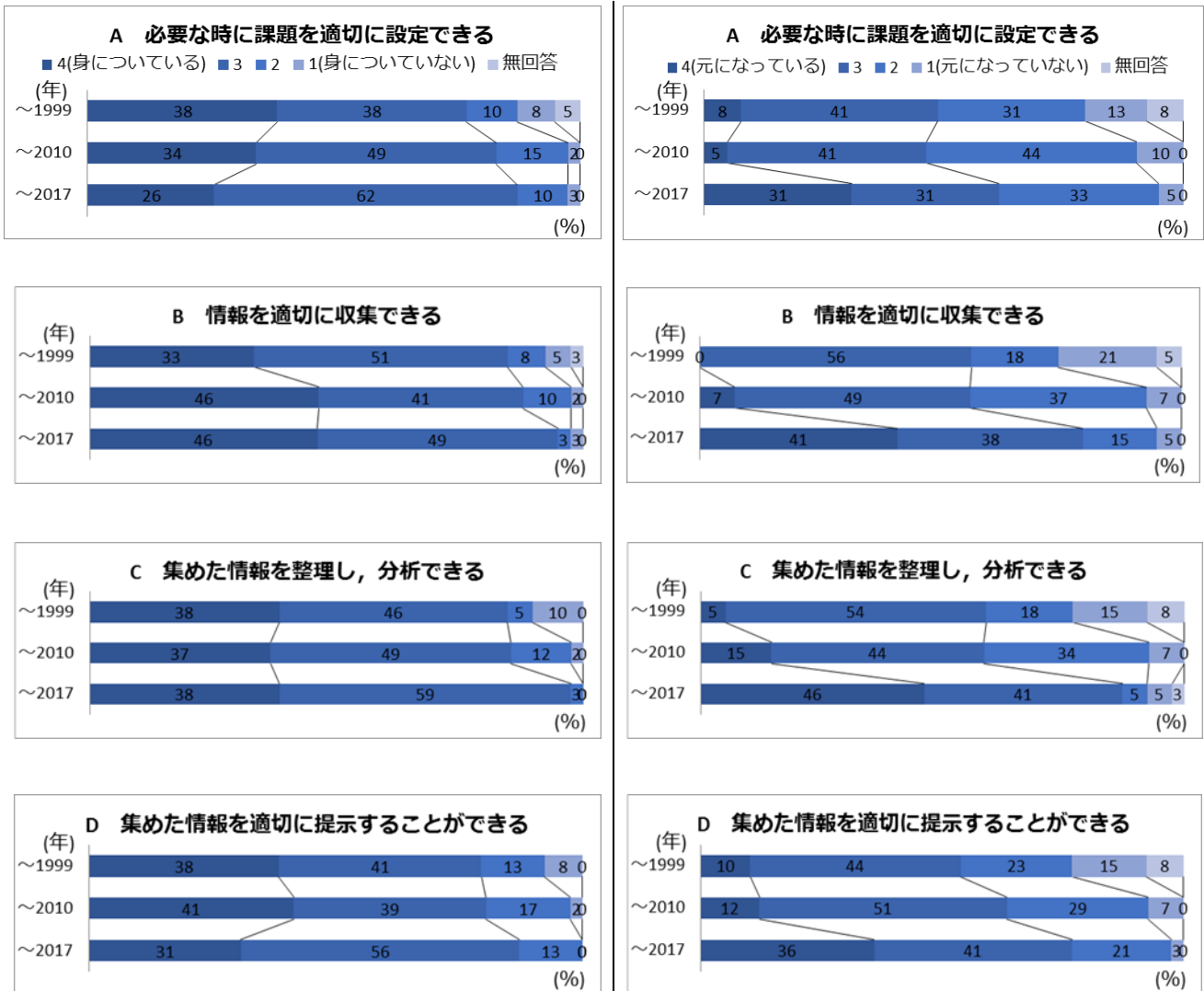


図1 質問紙調査2.と3.の結果1(A~D)

質問項目のうち、A~Fについては、2.でふれたBTの実際の探究的学習活動のプロセスを想定して設定している。図1のA~Dは、BTにおいて序盤から中盤の学習活動である。

「今、身につけている力」「BTで学んだことがどの程度、元となっていると感じるか」のいずれとも「4」または「3」の肯定で答えた人が、どの世代にも一定数おり、BTにおいて情報を活用する力を培ってきたといえる。ただ、「4」または「3」で答えた人は、Ⅲ(下)の世代になるほど増えている。中には、「今、身につけている力」の「A」や「D」のように「4」の最肯定はⅢの世代の方が低くなっている項目もある。これらのことから、BTにおいて思考ツールを使い、論理的な探究学習を求めたⅢの世代では、重点を置いていた指導事項が活用できていると考えている卒業生が多いことがわかる。

しかし、Ⅰ(上)の世代においては、「BTで学んだことがどの程度、元となっていると感じるか」の項目が低くても「今、身につけている力」はある程度高い。これは、中学校生活から時間が過ぎ、中学校の時に学んだことだけでなく社会生活により経験の中で培ってきたとも推察できる。

今、スキルがどの程度身についているか

BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか。

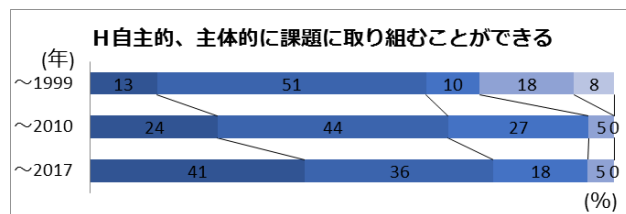
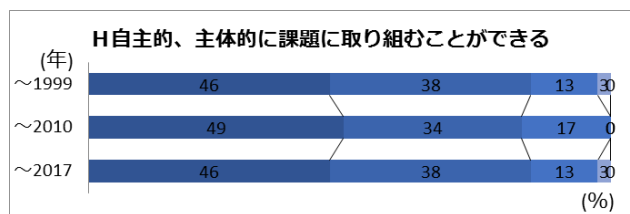
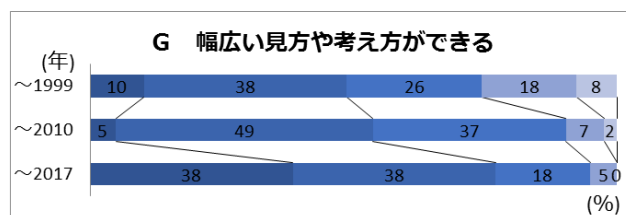
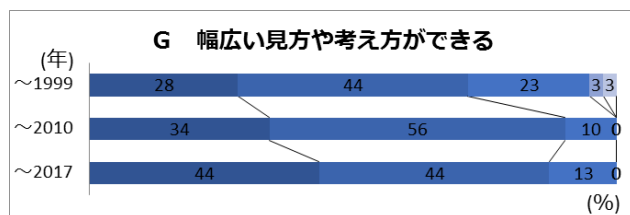
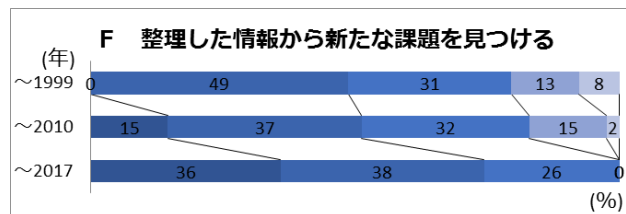
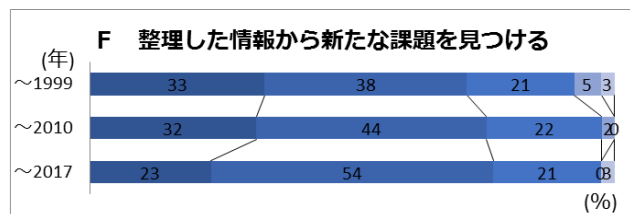
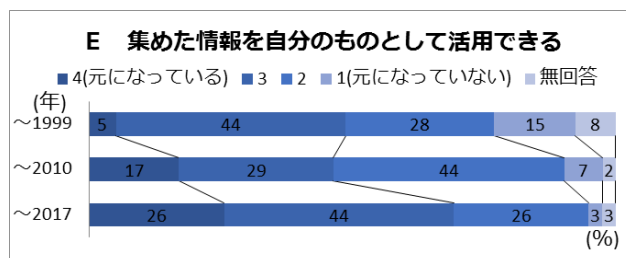
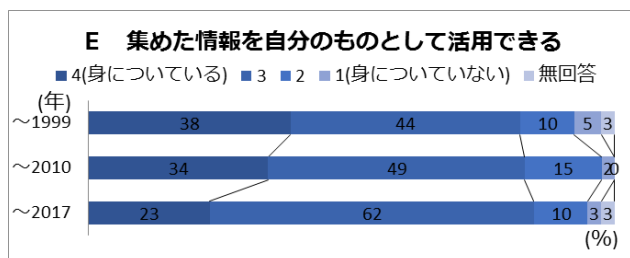


図2 質問紙調査2.と3.の結果2(E~H)

図2のEとFは、図1のA~Dと同じく、BTの実際の探究的学習活動のプロセスを想定して設定している。EとFは、BTにおいて終盤の学習活動である。

A~Dと同じく、EとFも「BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか」のいずれとも「4」または「3」の肯定で答えた人が、Ⅲの世代になるほど増えている。そのため、BTにおいて思考ツールを使い、論理的な探究学習を求めたⅢの世代では、重点を置いていた指導事項を学んだと認識している卒業生が多いことがわかる。しかし、「今、スキルがどの程度身についているか」については、「4」または「3」の肯定で答えた人は多いものの、「4」の最肯定を答えた人はⅢの世代になるほど減っており、EとFは十分に活用できているとは言いがたい。また、Ⅰの世代においては、中学校生活から時間が過ぎ、中学校の時に学んだことだけでなく社会生活により経験の中で培ってきたとも推察できる。

GとHについても「BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか」についてはEやFと同じ傾向だが、とくにGは「4」または「3」の肯定で答えた人が、Ⅲの世代になるほど増えている。「幅広い見方や考え方は、BTにおいて培われてきているといえる。

今、スキルがどの程度身についているか

BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか。

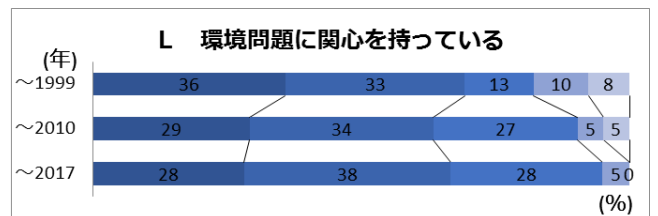
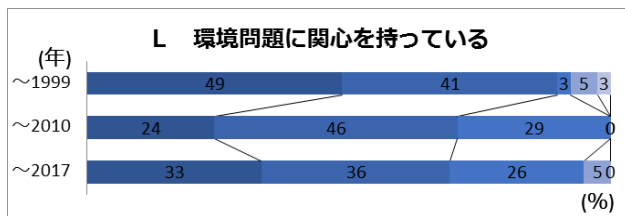
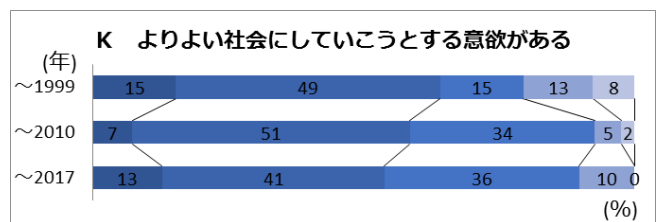
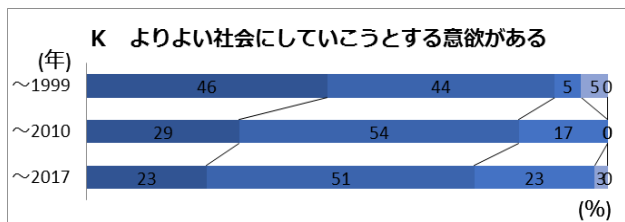
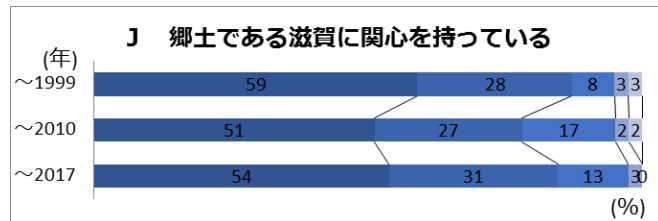
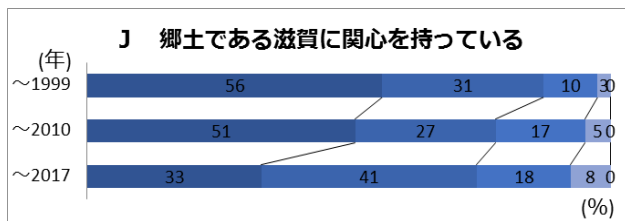
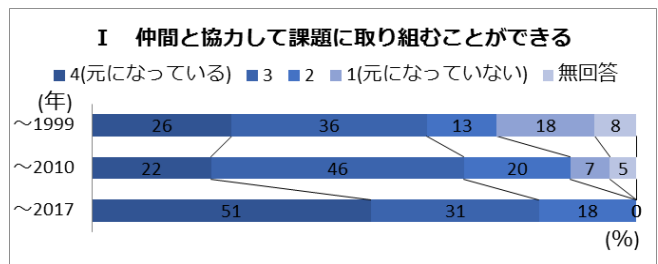
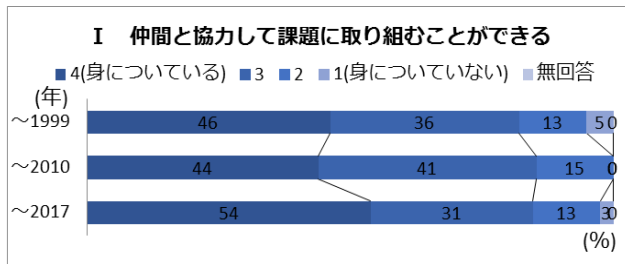


図3 質問紙調査2.と3.の結果3(I~L)

図2のHや図3のIは、BTの活動の特徴をふまえた質問項目となっている。H、IともにA~Gに比べてIやIIといった上の世代の「4」や「3」の肯定の割合が高い。BTの創設期から継続して重点的に取り組んでいることで、A~Gのように近年とくに力を入れている探究のプロセスよりも世代を超えて効果が出ているといえる。ただし、H、IともにA~Gと同じく「BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか」について「4」または「3」で答えた人は、IIIの世代になるほど増えている。そのため、Iの世代においては、中学校生活から時間が過ぎ、中学校の時に学んだことだけでなく社会生活により経験の中で培ってきたとも推察できる。

図3のJ~Lについては、BTの内容に関わる質問項目となっている。A~Iまでと違って、「今、スキルがどの程度身についているか」に関しては、Iの世代ほど「4」や「3」の肯定が多く、「BTを学んだことがどの程度、元となっていると感じているか」については、II(中)の世代の「4」や「3」の肯定が少ないという結果になった。昨今の若者の政治離れや無関心などの社会的課題が浮き彫りになった。

表5 質問紙調査5の結果(世代ごとに上位の3点と、その具体的場面)

4. でお答えいただいたようなスキルが、どのような場面で役立ったとお感じですか。
4. の記号と具体的な場面を3つまでお答えください。

～1999年	スキルと具体的場面	人数
J	郷土である滋賀に関心を持っている	18
	① 滋賀県・子どもの成長・県内スポーツに関心が増え、応援する姿勢が身についた。仕事で貢献できる事、プライベートで貢献できることを積極的にしている。	
	② 郷土の歴史を探訪するたびに関心を喚起してくれた附属での学習に感謝します。	
	③ 現在も滋賀に住んでいる。普段から、ニュース、状況から滋賀の話題になることが多い。中学校時からの関心ごととして常に新聞の地方版を確認する。	
I	仲間と協力して課題に取り組むことができる	12
	① 仲間と協力する、共に調査するという経験が附属では多く体験でき、それが社会に出た時、様々な(人材)の方とコミュニケーションを図りながら仕事を進めていくという土台になっていったように感じる。	
	② プロジェクトチームや、協力を必要とする場において、自らの役割を把握し、行動できるようになった。	
	③ 仕事の会議の際など、互い意見交換できるようにすることができた。	
L	環境問題に関心を持っている	7
	① 社会に出てからあらためて、他府県民と滋賀県民の環境意識の違いを認識した。自身の環境保護意識を自覚することができた。	
	② 地区の水路清掃に参加する。	
	③ 日常生活の家事の中で、琵琶湖や環境に及ぼす影響を考えながら行動できる。ごみの分別など。	
～2010年	スキルと具体的場面	人数
I	仲間と協力して課題に取り組むことができる	20
	① 勤務や引っ越しなどをしても、比較的早くに環境になじんで新しい人間関係を築けるようになった。	
	② チームで仕事を行う時の役割分担、助け合い(フォロー)、現場の指揮、緊急時の対応が自然とできた。	
	③ 学生時代も社会人になってからもBTで経験したように学年や性別がちがう人でも協力して様々な取り組みを共にがんばることができた。	
J	郷土である滋賀に関心を持っている	12
	① 結婚し、滋賀を離れることでさらに滋賀の歴史や観光地に対し関心を強く抱くようになった。	
	② 滋賀、特に琵琶湖に関するニュースには興味をもって積極的に調べている。	
	③ 出身地の紹介等で、自身をもって滋賀の良さを伝えることができた。	
H	自主的、主体的に課題に取り組むことができる	9
	① 仕事で、複数の人と連携する際、主体的に考え、行動を起こすことができる。	
	② 仕事をする上で、自分で課題を見つけて取り組むことができる。	
	③ 大学での卒業論文執筆時、課題設定から結論までの道すじをたどったBTの経験を思い出し、スムーズに研究できた。	
～2017年	スキルと具体的場面	人数
I	仲間と協力して課題に取り組むことができる	18
	① 公務員試験のグループワーク試験で話し合いをして1つのまとめができた。	
	② 大学の授業やゼミでグループで発表を行う際に役割分担をして、効率よく進行できた。	
	③ 高校でグループで自分たちが設定したテーマについて研究する際、役割分担して課題に取り組めた。	
C	集めた情報を整理し、分析できる	12
	① 高校での研究発表で情報を整理してそこから分析するという力が活かされた。	
	② 考えがまとまらなくなったときに紙に書き出して整理し、新たな発想を生み出すことができた。	
	③ 模試など自分のデータや勉強量から学習傾向を探るようになった。	
B	情報を適切に収集できる	9
	① 授業で資料集めをしないといけない時、BTで使った思考ツールなどを取り入れずばやく、簡単に情報を収集することができた。	
	② 高校での探究活動の際、多くの情報を得て、その中からの適切な情報及び役立つ情報をくまなく抽出することができ、そこから新たな考えへと分析できた。	
	③ 情報収集の際、情報の客観性を考慮して、インターネットばかりに頼らなくなった。	

表 6 聞き取り調査の抜粋

<p>①(I)</p> <p>●BT でどのような学習をされていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループワークで、気象と琵琶湖について調べた。グループは、同学年の生徒だけだった。琵琶湖研究所へ行ったり、大学教員の自宅を訪ねたりした。琵琶湖の濁流について教えてくれた。 活動は、自由にさせてもらっていた。先生は情報提供をしてくれるが、自分たちで休みの日にアポを取るなどしていた。 <p>【昭和 60 年(1985 年)卒・女性・研究員】</p>	<p>②(I)</p> <p>●BT で学んだことで、今どのようなスキルがついていると思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 好奇心を持つこと。自分で何かをやってみようという積極性。 協力して当たり前、と思うようになった。ものごとは 1 人ではできない。 現地に足を運ぶなど、行動する力。 <p>【平成 5 年(1993 年)卒・男性・大学教員】</p>
<p>③(I)</p> <p>●BT でどのようなスキルを身につけていたと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 人でやる方が得意な方だったが、グループで取り組む力を付け、いやでなくなった。 図書館へ行ったり、施設へインタビューに行ったりするなど、ネットではなく、足を運んで情報を得ること。 <p>●BT でつけたスキルが、自身の日常において、どのような場面で役立っていると思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 地元での就職時に地元愛が役立った。大学で滋賀を離れた時に琵琶湖や滋賀の大事さがわかった。 <p>【平成 8 年(1996 年)卒・女性・公務員】</p>	<p>④(II)</p> <p>●BT でどのような学習をされていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 3 年生では、滋賀にまつわる昔話を調べて、そこからわかる教訓を読み解いた。比叡山のお坊さんにインタビューをした。 <p>●BT でどのようなスキルを身につけていたと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 3 年生の時は、みんなをまとめようとした。 多かった BT の授業時間で、じっくり取り組むことができた。発表前を振り返るとむしろ少ないぐらいで、遊ぶ子はいなかった。 郷土への関心に関して、大学進学で滋賀を離れた時に滋賀の良さに気づいた。 <p>【平成 20 年(2008 年)卒・女性・企業研究員】</p>
<p>⑤(II)</p> <p>●BT でどのような学習をされていたか</p> <ul style="list-style-type: none"> 3 年生の時のテーマは「森」。県庁でインタビューのあとバスで山へ行き、木を切る体験をした。森の役割や、間伐の重要性を知った。 <p>●BT で学んだことで、今どのようなスキルがついていると思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報を見せること。プレゼンを工夫し、OHP を作ったり、もらった森林の写真をもとにクイズを作ったりした。模造紙も 1 枚書いた。 情報の吟味はあまりできなかった。このスキルは、大学生になってから身についた。 <p>【平成 22 年(2010 年)卒・女性・大学生】</p>	<p>⑥(II)</p> <p>●BT でどのような学習をされていたか</p> <ul style="list-style-type: none"> 2 年生は糸切り餅について。お菓子を食べに行こう、という雰囲気だった。 3 年生はヨシを育てた。下級生をまとめることに特化した。 <p>●今の中学生には、どのようなスキルを身につけておくべきだと感じるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「自由にやっていいよ」は附属の生徒には難しいだろう。昔は、調べて結果を出すことだけに特化していた。思考力は、小学校の方がむしろあった。 <p>【平成 22 年(2010 年)卒・女性・大学院生】</p>
<p>⑦(III)</p> <p>●BT でどのようなスキルを身につけていたと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション力。学年バラバラでのグループをまとめるときに必要だった。電話でアポを取ることにも緊張した。 高校では BT のような活動はなかったので、このときに身についたものが大きい。 <p>●今どのようなスキルがついていると思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今でもグループでしゃべる時にコミュニケーション力は生きている。アルバイトのアポイントなども問題なくできた。 大学でイメージマップなどのシンキングツール(思考ツール)を使う機会があり、思い出しながら使えた。 <p>【平成 25 年(2013 年)卒・男性・大学生】</p>	<p>⑧(III)</p> <p>●BT でどのようなスキルを身につけていたと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> テーマ決め力。つかれるが、力を入れた。 外に聞きに言って終わり、では評価されないので、仮説を立てて実験して、もう一度仮説を立ててもう一度実験をすることで研究が深まることを学んだ。 <p>●BT で学んだことで、今どのようなスキルがついていると思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校の探究の時間では、テーマを決めるのは、中学校でやっていたので、早かった。グループでテーマを決め、自分たちで調べて発表、という流れだが、とくに問題なくスムーズにできている。 思考ツールは高校の授業では使わないが、実際にかかなくても頭の中でできるようになった。 <p>【平成 28 年(2016 年)卒・男性・高校生】</p>

表5によると、どの世代でも「I 仲間と協力して課題に取り組むことができる」の項目は上位に挙がり、BT が長年にわたって重点として取り組んできたグループワークによる学習の成果といえる。

また、I やII などの世代では、「J 郷土である滋賀に関心を持っている」の項目が上位に挙がっているのに対し、III の世代では、上位には挙がっていない。時代による感覚の変化や、本校の教員の指導の重点や方法が違った可能性もあるが、表6-③④のように、年齢を重ね、滋賀県を離れたたり、滋賀県を見つめ直したりする時に形成される面もあることがわかった。

世代間によるちがいについて、I の世代では、「L 環境問題に関心を持っている」が上位に挙がっている。当時は公害問題や環境問題が社会問題として大きく扱われ、本校の教員の指導も環境問題に重点を置いていた様子が見える。

II の世代では、「H 自主的、主体的に課題に取り組むことができる」が上位に挙がっている。当時はいわゆる「ゆとり教育」とよばれ生徒の学習について主体性や自由性が強調された時代であり、その成果が出ているといえる。しかし、表6-⑤⑥のように、自由性が高くなかたでプレゼンテーションや発表の機会はあったものの、情報の吟味や分析は十分ではなかった様子が見える。

III の世代では、「C 集めた情報を整理し、分析できる」「B 情報を適切に収集できる」が上位に挙がっている。表6-⑦⑧のように、情報を活用する力が卒業後の進学先での学習に生きてきている様子が見える。ただ、情報を扱うスキルは評価されるものの、「郷土である滋賀」や、「環境問題」への関心については他の世代よりも弱い。

次に、表6 に関して先述したもの以外に読み取れることを挙げる。表6-①②③④⑦のように、各世代を通してグループ学習によるコミュニケーションスキルが身につけていると評価されている。これは、図2-H、図3-I、表5 からも「I 仲間と協力して課題に取り組むことができる」「H 自主的、主体的に課題に取り組むことができる」の項目が高いが、仲間と協力したり、自主的、主体的に取り組んだりすることで、コミュニケーションスキルの高まりへとつながっていることが見える。

授業時間数に関して、I の世代とIII の世代は、表1 に示したように概ね24 時間程度で行っているが、II の世代は30～54 時間で行っていて多くの時間をかけていた。表6-④によると、II の世代でも、発表前の時期は時間が足りないぐらいだったとのことで、探究的学習活動は時間をかけるとより深い学びとなる可能性が高まることが見える。授業時間が短くなったIII の世代は、時間を削減して「情報の時間」や各教科での横断的な学びと絡めて深い学びになるよう努めてきた。しかし、同じように授業時間の短かったI の世代については、表6-①のように、休日や長期休業中などの時間を活用してきていたことがわかった。そこで時間をかけることで、表6-①②③のように、インターネットのない時代でも、「足を運ぶ」ことで深い情報を得ていたようである。

また、表6-⑧によると、III の世代では高校で「探究」の学習が始まっていることがわかる。それまでは表6-⑤⑦のように、高校ではBT のような探究学習はなく、大学に進学してから研究が始まる状況だったが、近年は高校でも総合学習を「探究」の時間として位置づけるところが増えてきた。本校のBT も高校の教育課程とどう接続していくかを検討する必要がある。

6. 調査からわかったこと

本校の卒業生がBT を通して身についたと感じているもののうち、主に2 つの力は分類した3 つの世代において共通だった。

その1 つは、グループで取り組むなかで、仲間とともに自主的・自立的に課題に取り組めるようになり、コミュニケーション力がついたことである。もう1 つは、探究的学習活動のプロセスに関する情報収集・活用能力である。

しかし、3 つの世代ごとに違う傾向も見られた。

III の世代は、先述した情報収集・活用能力について、BT や「情報の時間」、教科の学習を通して論理的な探究学習を求められてきたため、力が身についたと感じている傾向がとくに強い。しかし、郷土への関心やよりよい社会にしていこうとする意欲、環境問題への関心は弱い。

II の世代は、学習時間を他の世代よりも多くかけて、丁寧に、主体性や自由性の高いBT の学習に取



り組んできた。しかし、若干ではあるが、情報活用能力について他の世代よりも低い項目がある。

Iの世代は、限られたBTの学習時間の中で、主体的に工夫して学習していた。郷土への関心やよりよい社会にしていこうとする意欲、環境問題への関心は高かった。しかし、下の世代ほどは情報活用能力がBTにより身についたという実感はなかった。

ただ、根拠が本年度に実施した質問紙や聞き取りによる調査のため、対象者の成果の実感が、BTの学習によって身に付いたものなのか、その後の経験の中で身に付いたものなのかを、正確に区別することは難しい。また、BTの学習だけでなく、時代による社会的な課題や、対象者の卒業後の社会的立場による経験によっても身に付いている力には差が生じるため、調査結果を分析するには、注意が必要である。

7. 今後に向けて

本調査を通して、本校が全国に先駆けて実施してきたBTにおいて、中学生が身に付けてきた力が、卒業後に様々な場面で役立っていることがわかった。また、当時の各教員がどのような課題意識を持ち、どのような学習指導の重点や方法で臨んだかによって、身に付いた力に世代ごとの違いが生じていることがわかった。

本校でこれからもBTや総合学習を続けて行くにあたって、大きな骨子は維持した上で、生徒や時代の課題を見据えて、何を重要視して取り組んでいくとよいのか、検討を続けていく必要がある。これはBTに限らず、「情報の時間」や他の教科と、または高等学校との連携など、すなわちカリキュラム・マネジメントが必要であろう。こうした点をふまえて、今後も本校のBTや全国の学校の総合学習が発展することを願いたい。

調査に関しては、卒業後、時間の経っている卒業生ほどBTを学習してからの時間が長く、社会経験も豊富になっていくため、調査結果の世代間の単純な比較が適しているのかという課題も生じた。この課題を解消するには、BTを学んでいない本校の卒業生以外の方も調査して比較する必要がある。この点に関しては、今後の課題としたい。

■注

- 1) 滋賀大学教育学部附属中学校「生きる力を育てる総合学習の実践-必修学習・選択学習との関連を図って-」, 明治図書, 1997
- 2) 滋賀大学教育学部附属中学校「選択履修と総合学習の新しい展開-『びわ湖学習』を軸にした自己学習力育成の教育課程-」, 図書文化, 1991
- 3) 滋賀大学教育学部附属中学校「総合学習『BIWAKO TIME』の学習効果検証 検証:総合学習の是非を問う -総合学習の時間は本当に必要なのか!?-」, 2006
- 4) 田村学, 黒上晴夫, 滋賀大学教育学部附属中学校「こうすれば考える力がつく! 中学校思考ツール」, 小学館, 2014
- 5) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」, 2008, pp96
- 6) 原田 雅史「探究的学習活動の過程で自ら学びを深める総合学習「BIWAKO TIME」の実践」, 『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』60, 2017
- 7) 以下にもBTの取り組みを紹介している。
田村学編著「平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間」, ぎょうせい, 2017
- 8) 本校でBTのルーツは昭和58年(1983年)から始まった「郷土学習(びわ湖と私たち)」であるが、表1に示したように、その前年の昭和57年(1982年)から「総合学習」として自主学習を始めている。そのため、今回の調査対象を昭和57年度、すなわち昭和58年卒業生からとした。

本研究は科研費の平成29年度(2017年度)科学研究費助成事業における奨励研究助成を受けて行った(課題番号17H00052)。

本研究にあたって国際日本文化研究センター 山田 奨治 教授と、本校校長・滋賀大学 久保 加織 教授から指導いただいた。